

不安感の強いAさんへの支援

社会福祉法人嬉泉 おおらか学園

富田 嶺介

(安心感)

1. 目的

Aさん（知的障害を伴う自閉症で20代後半の男性）は積極的に活動に取り組み、人懐っこい性格の持ち主の方で、週末は家族での外出を楽しみに過ごしていた。しかし、家庭環境（家族の介護等）の変化から、以前とは違った予定になることも多くなるにしたがい、Aさんの行動に変化が見られ、人の動きに敏感に反応して、確認行動（気になる事を紙に文字で書く）が頻繁におこされる様になった。不安が解消されないと、落ち着きが無くなり居室を飛び出すような行動に発展していった。その後もAさんは登園したい気持ちはあるものの、家族（母親）と離れることができなくなり、Aさん一人では居室に入れなくなってしまった。Aさんが、何に対して不安を感じているのか、Aさんとのやりとりを通して見出して理解を深めることで、解りにくいAさんの不安を解消できるのではないかと考えた。

2. 実践内容

まずは落ち着いてコミュニケーションを取れる様に、母親が近くにいる状況で本人の確認行動に関わっていった。Aさんからは、登園後の予定や週末の外出の予定、家族の事が多く出てきた。その場で分かる予定は応え、分からない事は母親に聞きに行くという不安感を整理する形で関わっていった。気になっている予定が分かる事で、当初はその場に留まり難かったが、少しずつ座ってやりとりが出来るようになっていった。徐々にAさんの行動に変化がみられるようになり、居室の様子を見に近くまで覗きに行くようになった。加えて、Aさんは食べる事が好きで学園の給食を気にしていたので、「給食を食べたら帰ろう。お母さんは廊下で待っています」と食事後の見通しが持てるように伝えた。食べている途中で母親の様子を見に行くことはあるものの、「母親がいる」という環境を保障することで、落ち着いて給食の場面に参加出来るようになっていった。給食を安心して食べられるようになってからは、活動への参加を働きかけ、少しずつ学園で過ごせる時間を増やしていった。当初は、廊下にいる母親の様子を気にする事もあったので「気になったら見に行っていよいよ」と安心材料を提示、作業についても本人に選んでもらい、活動に気持ちを向けて取り組める環境を整えていった。

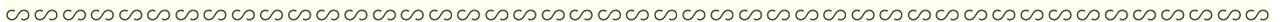
学園で落ち着いて過ごせる時間が増えてきて、その中でAさんの確認行動に関わっていくと、主として不安に感じているのは家族についてのことだった。Aさんも家族を心配していた事が分かってきたが、母親の前では別の話題をしてしまう様子が見られ、本心を言い難いように感じた。そこで、「Aさんは家族の事が心配なんだよね。代わりに伝えようか？」と代弁を提案すると、最初は直面できずに話題を変えようとしていたAさんも、徐々に伝えたい気持ちを出せるようになった。その様な変化から、給食のタイミングで母親も食事を食べに帰ると伝え、離れるきっかけを作ると、母親が近くに居ない状況でも過ごせる様になっていった。次第に母親を気にせずに居室に入れる様になり、不安な場合は途中で家に帰れる事を伝え、安心して登園出来る環境作りを進めていった。また、確認行動に対して丁寧に付き合っていく事で、母親との離れ難さは次第に見られなくなっていった。

3. 結果（私たちが学んこと）

A さんを理解していくうちに、A さんは自分の気持ちを伝える事が苦手なのだという事が分かってきた。本当は伝えたい事があるが直面し難く、本人も気持ちの解消が出来ずに強迫的な不安状態に陥りやすく、さらに表現がわかりにくくなってしまいう特徴があることが感じられた。そこで、確認行動から本心を探っていき、本当に伝えたい事を支援員が理解すると、確認行動の回数も減り、不安感が強まる事なく過ごせる様子も見られている。

4. 今後の課題

本当に伝えたい事を伝えてもいいという経験を人との間で積み重ねていくことで、A さんが自分の本心を素直に出していける行為に繋がっていくのではないかと考えられる。その為には A さんの確認行動や不安感を理解する人を増やして、安心して過ごせる環境作りを進めていくことが望ましい。今後も、自分の中で不安を募らせていくのではなく、伝えたい人に本来の気持ちを伝えられた、ということや分かってもらえたという実感が得られるような支援が必要と考えている。



<助言者コメント>

森田 規子（世田谷区教育委員会事務局教育相談専門指導員）

感染症禍により、園生の不安や緊張への対応、安全・安心への配慮に富田先生も本当にご苦労をされていると思います。

A さんは普段の学園生活では、人とのかかわりを楽しまれている様子が伺えます。社会全体がマスクで人の表情も見えない状況には、私たちと同じように通常とは異なる緊張感や違和感を感じていたと思います。そこに、ご家族のことが重なり、心細い気持ちに圧倒されたことでしょうか。好きな給食も落ちて食べられないほどにご家族を案じられていた様子に、富田先生も辛い時期だったとお察しします。「気になることを文字（幾つかの単語）で書いて知らせてくれる A さん」は素晴らしいと思います。そして A さんの文字による発信や行動などから、支援者が「こうかな？ ああかな？」と気持ちを推察して声かけをすると、きっと A さんの不安がちょっと止まったり、注意の方向が変化したりしたと思います。その様子を丁寧に捉えて支援を調整されたと思います。特に、食事後の見通しが持てるような説明をされたことは、A さんの個性や行動をよく理解している支援者だからこそそのアイデアだったと思います。

私たちは、誰でも自分の不安や悲しみなどの感情に気づかず、むしろイライラしたり、ぼんやりしたりというような経験をします。そういった時に感情がことばになると何だか落ち着きます。A さんの胸のつかえも、支援者のことばで変化したと思います。A さんの声の調子や仕草などを細やかな信号として捉えて、かかわりを工夫されているので、これからも A さんの発信力が少しずつ進化していくでしょう。また、器用な A さんのシフォンケーキ作りがさらに上達することも期待します。